

# ふるさと探訪

[26]

毎年十一月十日は「建田（たつた）の金刀比羅さま」として親しまれている金刀比羅講大祭が開かれる。二百九十年ほどの歴史がある同大祭だが、個人の家を会場として行われるため近年、一部の人の間からは日時や会場の変更などの

声も聞かれていた。そこで最近、講員らを対象としたアンケート調査が実施されたがその結果、「やはり苦労してもこしはばらくは、現状のまま継続していこ

## 3義人たたえる「建田の金刀比羅講」

う」との思いを確認。今年も忠町の石原敏治さん宅を講元に盛大に催される。

### 直訴成功は金刀比羅さんのお陰

宝永九年（一七〇九）から始まったとされるこの大祭の由来を調べてみると、この年は五代將軍・綱吉が亡くなり、六代將軍・

た佃の義平、忠の伊左衛門が追手の早駕籠（かご）が通り過ぎ、三人は難を逃れた。その後、

## 290年続く大祭を後世に

### 住民らの心意気が伝統継承の力

家宣が誕生した年。しかし、大祭のきっかけとなった出来事はそれより六十年ほど前、今から三百五十年ほど前に起こった。

当時、上林を治めた藤懸永重は十七歳で二代目城主の座についた。藤懸家は関ヶ原の合戦で豊臣方につい

### 今年も10日、忠町の講元で開催

たため、減転封されていた。先代からの家老・筒井玄蕃は、永重が政治に疎いのをよいことに腹心と共謀。豊臣家の残党と気脈を



明治23年以降の講元の名前が記録された書物。一人ひとりの講元の様子

ら三地区が持ち回りで当番となり、個人の家を講元として開かれている。講元は一年前、前講元から受け継いだ「三寶」と呼ばれる「神体を家内に祭り、毎日水を替えたり、毎月十日には宮司による例祭なども執り行う。

首から金刀比羅さまのご神符が下がっているのを見て、川を渡ってくれた。江戸に着き、老中に直訴がなされた二人は「もうこれでいつ打ち首になってもお上」と思っていたが、お上は三人を開放。玄蕃一味は極刑を受けた。これもすべて金刀比羅さまのおかげと以来、三地区では盛大に金刀比羅講大祭が行われるようになった。

毎年、3町区で講元を持ち回り大祭は、始まった当初か

今年、三寶が来年の講元である岩波功さん宅に渡される「戸渡し式」は午後三時ごろに行われる。長年この大祭を支えてきた地域住民の心意気が、伝統継承の力になっていることは間違いないさそうだ。（四方）



昨年（2023年）の金刀比羅講大祭。お参りした参拝者はお札を大切に持ち帰る（佃町で）